

ついて、さらに記録を資料にして、指導過程を分析し、次の二つの指導のちがいを発見した。

イ、子どもたちと話し合いをしているが、保育者の意図に近い子どもの意見を保育者自身がまとめていく。ロ、話し合い過程で、子どもたちの意見をひきだし、それによってまとめていく。

私どもは、このイとロの指導過程のちがいは、子どもたちの生活を大事にし、その生活と課題を充分にむすびつけて話し合う指導(イ)とそうでない指導のちがいが、しかも、子どものなかみを大切にすると、教える内容を大切にするちがいというふうに考えている。

いま一つは、以上の保育の方法と子どものあらわれをみた。

話し合いのテーマは、生活の約束と約束を破った場合の話し合い。あらわれとして――

a、保育1では、子どもたちの肯定は早い。しかし、約束を破った場合の子どもの意見では、保育者の意見がオーム返しにできてきている。b、保育2におけるイでは、子どもたちの生活に基づく意見がみられる。(具体的場面で見たり聞いたりしたこと)が告白、つげ口的発言が多く、問題の結論になるとオーム返的なまとめになりがち。c、ロについては、約束についての問題状況、場面、それについての子どもの意見。(これはおとなにとって突飛でもしろい意見)がみられた。

結果 私ども保育を考える者は、子どもがたんに肯定するだけでなく、それが体験化することを願っている。そして、生活指導の話し合いでは、子どもの生活のなかでの意見や行動を充分に取り上げて話し合いをあげ、まとめていくことが大切であるといえよう。

なお、他の保育内容、指導過程を検討しながら、問題点をはっきりさせたいと考えている。

(大会発表論文抄録72頁)

幼児の言語指導に

ついでの一考察

大阪樟蔭女子大学付属幼稚園

田中千鶴子・泉 加津子

石橋 和子・斎藤富美子

日常の保育をしながら幼児の言語生活を観察していくと、いろいろな点で疑問が起ってくる。よくしゃべる子どもと、殆んど口をつぐんで、こちらの問いかけに対してだけ僅かに必要最少限度のことばだけを話すもの、或いは唯だまって首を縦や横にふるだけのものなど、果してどれ位の語いをもち、どれほどの発音の誤りがあるであろうか、その実態をつかむ必要がある。また一日の保育で保育者が話すことばは数知れない程あるがそれらを幼児はどのように受けとり、どのように理解しているのだろうか。例えば幼児の大好きな童話は、どんな形で理解され記憶されているのであろうか。同時にこの活動の基礎となるものとして考えられる生活経験発表という活動は、幼児が保育者や友だちに、自分の経験したこと知っていることを話したくならないという気持を巧く指導し、方向づけして、発表能力が増すように仕向けていく方法だ。幼児に多勢の前でも話せる習慣をもたせ、自信を育てることと、相手に解ることばで自分のいい分を発表することを、幼稚園などの親しみ易い雰囲気の中で、経験させることは、幼児の言語指導上大切なことといえよう。

以上のような意図のもとに調査した結果は、次の通りであった。1、話しと発音の問題を3才児において調査した結果、発音の乱れ

については一時間に19、35の乱れを示すものもあり、また全く乱れないものもあった。語いについては、一時間に使用した数が最少92、最多179と個人差が多くみられた。

2、生活経験発表をさせる時、幼児は自分の考えを、どういつて相手に伝えたらよいか知らないことが多い。その時に保育者が助言し、話を誘導することによって発表力を増すことができる。最初はただ一つの単語でしか発表できなかった幼児も、回を重ねて誘導を受け助言されることによって単語数を増し、使用する品詞の種類も多くなり、体系的な表現法を用いることができるようになった。

3、童話の理解度は、話の内容に対する興味の度合と深い関係をもっている、ことばの理解と同時に、話の内容を印象づけられることの度合によって左右される点に注目させられた。知能の高いものが必ずしも再生度が高いとはいえないが、再生度の高いものは何回のテストに対しても得点が高く、知能の低いものは相変わらず低いという点には注意する必要があるようだ。また、話し手は、子どもと親密な関係にある者ほどよく、馴染みの少ない人から聞かされた話の再生度は低い傾向があるようだ。しかし、保育年数が多くて、話をきき経験を数多くもっていた者は、きき方が上手で、話者を選ばないように見うけられた。

(大会発表論文抄録55—56頁)

童話に対する幼児の関心の一考察

大阪樟蔭女子大学児童研究所

大西憲明
梅田晴美

目的 他人のお話を聞くとともに、これに興味をもって理解しようという態度を培うことが、幼児の思考を伸ばすのみならず、経験を深め、想像活動を豊かに発展させる。しかし、問題は、童話がどういう内容を持ち、どのように構成されており、しかも基本的には、なにを幼児に訴えるかという意図が、かれらの発達的特質に適切な形で表現されているかどうかであろう。従来から、こういう面で、健康で明るく、親しみがもて、適度の活動性を伴い、反復をもち、知識欲を満足させ、しかも情緒的に訴える芸術的うるおいをもち、道徳性を見えるときともに、空想性を誘発するものがよいとして、選択の基準にされた。だが、こういう基準を理論的に、かつ抽象的に設定することは容易であつても、おとなとは異つた心性をもつ幼児自身にとつて、どのように印象づけられ、理解されるかという点が明らかにされないかぎりには、大きな価値がない。

従来から幼児の童話的関心・空想の実験的研究が多く試みられているが、実験法自体に多くの問題があり、その実施結果の考察にも飛躍的なものが潜んでいる。ここでは、今後の研究の出発点として、一応次のような実験を試みた。

方法 童話実演によってあたえられた印象的效果を、実演直後に再生的に表現させることによって、どういう構成要素がどのような連関において記録されているかを見ることにした。

手続は、すべて集団的にお話を聞かせ、これの再生は個別的に行ない、被験者は正常幼児三―五歳級を対象とした。実験は第一条より第五条に分けた。

(一) まず幼児の生活に即した話材を用い、これを標準語で平板に話したテープ録音で三分間聞かせたが、ほとんど再生的応答を示さず、基本的には童話事態にはいるものが極めて少なかった。